

す。藝術と人生との關係も斯の如く、兩者は相刺戟、相指導するもので、藝術が人生無くしては成

り立たぬと同じく、人生に取つても亦藝術は缺く可からざるものなのであります。(ゴルドンによる)

『トムソーヤ』

〓 英文學にあらはれたる子供(十三) 〓

東京女子高等師範學校教授 岡田みつ

前號の『ジエンパイア』の續きを掲載する筈ですが正月の讀物としては少し陰氣で似つかばしくなく感ぜられますから一讀して失笑するやうなものと此一回だけ別のものを挟みました。此『トムソーヤ』(Tom Sawyer)は近代有名の米國の滑稽家マークトエーンいたすの書いたものでトムといふ惡戯少年の話です。

「トム！」

返事が無い。

「トム！」

返事が無い。

「彼あれ子は如何どうしたのでらう。こらトム！」

老女は眼鏡を下げて、其上から室内を見廻した。

其から眼鏡を上へ舉げて其下から見た。此老女は少年程の小さい物を見るに眼鏡で見た事はない。といふのは其眼鏡ツていふのが他所行よそゆきの、御自慢の品で、見得の爲に出來てゐるので、實用の爲でないから實は煖爐ストーブの蓋ふたを目に當て、其から覗いても同じ譯なのである。老女は一寸怪訝な顔をして居るがやがて室内の道具に聞こえる位の高調子で忌々しさうにはないが獨語した。

「よし見付けたら最後、必然きつと……」

と言つて後あとは止めて終つた。實は、其時は、早く身を屈めて箒で寢臺の下を衝突つづいて居て、其方

に力が要^い用^つたからで、——但し突^つき出^さされたのは只猫一疋であつた。

「あんな子^こッたらありやしない。

と言つて、明け放^はしてある入口^{いりぐち}の處へ行つて立つて、其でも庭となつてゐる、トマトの木やジムソン草などの生えてゐる中を見渡した。トムは居なかつた。老女は遠^{とほ}さを見計^はらつて、聲^{こゑ}を張^はり上げて、

「こら——トム！」と怒鳴^{いか}つた。

途端^{とつぜん}に後^{うしろ}にコソリと音がした。老女が振り返ると、丁度一少年が逃げやうとする處なので、矢庭に、その着物の端を掴^{つか}んで引据^{ひきよ}えた。

「やれ！ あの押入^{おしり}を思^{おも}ひ付^ひきそ^うなものだつたに。彼處^{あそこ}で何^{なに}をして居^ゐた。

「何もしやしません。

「何もしない！ 手^てを御覽^{ごらん}！ 口^{くち}を御覽^{ごらん}！ 其は何^{なに}だい？

「僕は知らない。

「私^{わたし}や知^しつて居^ゐるよ。ジャムだ。ジャムに違^{ちが}ひない。ジャムに手^てを出^ですと、非道^{ひどう}い目^めに遇^あはすと何^{なに}遍^{びん}もく其方^{あつち}に言^いつたらう。其鞭^{むち}を御覽^{ごらん}し。

鞭^{むち}が空^{そら}間に閃^{ひら}いた。危機^{あやう}一髮^{いっぱつ}と見^みてとつて

「あら！ 伯母^{おば}さん後^{うしろ}を御覽^{ごらん}！」とトムが大聲^{おほこゑ}を上げた。

老女はくるりと振り向^{むか}いて、狼狽^{あわて}て裳^{つま}を撮^とんだ。其間^まにトムは一目散^{ひとま}に扉^{かど}を這^はひ上^あり、躍^とし越^こして逃^にげて終^{しま}つた。ホリー伯母^{おば}さんは、愕然^{ごつくり}して立つて居^ゐたが、小聲^{こゑ}に笑^{わら}ひ出した。

「ほんとに呆^{おろ}れた子^こだよ。私^{わたし}にや如何^{いか}して氣^きが付^つかないのだらう。あゝして始^し終^つ人^{にん}を欺^{あざ}すのだから、私^{わたし}だつてよい加減^{かげん}に、前^{まへ}以^もて其^{その}れが知^しれさうなものではないか。年寄^{としより}の馬鹿^{ばか}ほど大馬鹿^{おほばか}はないのだ。譬^{たと}にもいふ古犬^{ふるいぬ}に藝^ぎは仕込^{しこ}めずさ。だが、あの子^こと來^きたら、同^{どう}じ手^て段^{だん}を二^に日^{にち}と續^つけて出^でさないのだから今^{いま}度は如何^{いか}いふ手^て段^{だん}で來^きるか知^しれやしない。御^ごまけにあの子^こはどの位^{いかに}調^{てう}戲^ぎ

ふと、私が腹を立つつていふ程合を知つて居ると見えて、人に油断をさせたり、笑はせたり、勝手な真似をするから、つひ腹も立てず非道く打擲した事もない。あれでは爲にならない。眞實にどうも爲にならない。「鞭を惜んで子を害ふ」と聖書にある通りだ。私や罪業を積んで、あの子と二人分の咎を背負つて居るのだよ。悪戯一杯で仕様のない子だが、あれも死んだ妹の子だから痛い思ひはどうしてもさせられない。甘やかして置いては、濟まない／＼と氣を揉み、打つてば打つて可哀さうで堪らないし。あゝまあ仕方がない。女から生れた者は、命短くして苦多しと聖書にも言つてあるから、そういふものなのだろう。あの子は今日は必然怠惰休をするだろう。その罰に、明日仕事をさせなくてはならない。日曜日に仕事をさせるのは大骨折だけだ——他家の子が皆遊んでゐる時だし、御まけにあれば仕事の嫌な事一通りでないのだから。

併し、あの子の爲だから無理にもさせなくては。とんだ悪人に仕上げてしまつてもならないから トムは、怠惰休をして面白く遊んだ。夕食前に歸宅して、ジムといふ黒奴の少年が明日の薪を切つたり、焚付を割つたりしてゐるその手傳をするのに僅に間に合つた。いや、ジムが仕事を四分の三する中に、今日の出来事を話して聞かせるだけに間に合つたといふ事なのだ。トムの異腹の弟のシッドは、木屑を拾ふ役目を大方濟ませて居た。此子は穩順しくて、手數のかゝる子でなかつたから。

トムが夕食を食べ／＼隙を見て砂糖を盗んでゐると、ポリー伯母さんは、トムが茫然引掛かつて、口を滑らすやうにと巧みな質問を試みた。伯母さんは單純な心の人にあり勝ちの、自分は深い策略が上手なのだとの自惚があつて、見え透くやうな手段を、世にも珍らしい深謀智略だと得意であるので。

「トムや、今日は學校でなかく暑かつたらう
「あゝ。」

「大變に暑かつたらう。」

「あゝ。」

「水泳にゆきたくなかつたかい。」

「トムの心は冷りとした。……疑念が萌して。伯
母の顔をじつと見たが顔色では何も讀めなかつた
で、トムは

「いゝえ、——なに、そんなにも思はなかつた」
と言つた。

老女は、手を伸して、トムの肌衣シヤツを觸つた。

「だが今はもう暑くはあるまい。」

と言つて、トムのシヤツの乾いて居るのを發見
し、人には自分の心の中にある思惑おもひを感付かせな
かつた手際に、伯母さんは我から感服してゐた。
併し、トムの方では、風の吹き工合を早くも悟つ
て、伯母さんの先を越して、

『水で頭を打たせた人もあつたよ。僕の頭は未だ

濡れて居る。ね、こら！』

伯母さんは、其點を見逃して居たのを口惜しが
つたが、新に妙計を思ひ浮べて、

「頭を水で打たせるのにやシヤツのカラを外さ
なくてもよいのだらう。上衣ジヤコットのボタンを外して
御見せ。」

トムは、平氣の平座へいざで上衣を開けた。シヤツの
カラは、ちやんと縫ひ付けてあつた。

「ちよつ！ 宜いから彼方あっちへ御出で。きつと意
けて學校を休んで、水泳にいつた事と思つたに。
勘忍してやるよ。御前は譬にいふ毛を焦した猫
だ。見かけよりも良いのだ、今日だけは。」

伯母は、やり損つたのが殘念でもあり、トムが
どう間違つたか、善い行爲の方へ轉んだのが悦ば
しくもあつた。

處が、シツドが、

「でも、伯母さんは、白い絲でカラを縫ひ付け
たらうあれは黒いよ。」

「さうとも白い糸で縫つたよ。トム！」

トムは、一刻も愚圖／＼しては居なかつた。戸口から出がけに。

「シッド奴 打つてやる」ぞと言ひ捨て、立去つた。

安全な處へいつてから、トムは、上衣の垂れに刺してある二本の針を熟と見た。二本とも糸がくる／＼巻き付けてあるが、一本には白糸、一本には黒糸が通してあつた。

「シッドが黙つて居れば、伯母さんは氣が付きはしないのに。厄介だナ。伯母さんは白い糸でしたり、黒い糸でしたりするのだもの。何れかに定めて置けばいいに。とても番をして居られやしない。シッドの奴を打つてやらなくつちや。きつと懲らしてやる。

トムは此村の模範兒童ではなかつた。トムは模範兒童の事はよく承知してゐた、大嫌ひなのであつた。其から二分も經たぬうちにトムは前の苦勞は忘れて終つた。その苦が大人の苦よりも輕いか

らといふのではなく、他にもつと面白い事があるからで、此際トムの心を奪つてゐたものは口笛のかはつた吹き方であつた。ある黒奴から教はつたばかりなので、緩くり何處ぞで吹き立てたくて堪らなかつたのだ。今しも彼は口から美音を注ぎ出して精神は大満足で、往來を流してゆくと、向ひから見知らぬ男兒がやつて來た。双方疾視合で喧嘩の吹つ掛つこをした揚句が、眞劍の擲合となつて、互に髪を搔る、衣服を裂く泥まみれになる、擲ち合ふ、引掻き合ふ、大混亂の眞中から、見る／＼トムが敵に馬乗りになつて、拳を固めて殴り付けてるのが明瞭見えて來た。組敷かれて口惜泣きに泣いてゐる子が「降参／＼」と苦しげな聲を出したので、トムはやうやく手を緩めて、

「様見ろ。こんどから相手をよく見てから、馬鹿にしろ。

と言ひ放つて、意氣揚々と引上げた。

其夜、トムは晩く歸つて、窓からそつと這ひ込

むところを、圖らずも、伯母さんといふ伏兵に見付けられてしまつた。伯母さんはトムスの衣服の様を見て、明日土曜の休み日を家へ置いて、仕事を課さうとの心が巖いははの如く堅くなつた。

土曜日どようびの朝になつた。夏の世界は、陽氣で活氣が溢れて居た。人の心は浮き立ち、若い者などは歌ひ出す位。どの人の顔にも喜悅よろこびが見えて、歩調あしどりさへも踊るやうであつた。ローカストの樹は花盛りで、香氣芬々としてゐるし村の彼方あまたのカーデフ山は、綠鬱蒼みどりとして、丁度此處からは極樂の地かと思はれさうに、靜かに、夢のやうに、人誘ひ顔に聳えてゐた。

トムは、白ペンキのバケツと、長柄の刷子ブラシとを提げて、往來へ現れた。而して、板塀を見渡して、忽ち元氣銷沈して終つた。塀の高さが九呎長さが三十ヤードだ。あゝ、人生空漠、生存は唯之苦だと歎息しつゝ、刷子をどつりぶ浸して、頂邊てつぺんの板を横にすつと撫でた。今一度やつた。更に又一回

試みた。而して一條の白くなつた部と、目先遙の未だ白くなつて居らぬ部とを比較して、落膽がっかりしてトムは腰を下した。すると、ジムがバケツをぶら下げて、唄ひながら、門から跳ねて出て來た。トムは、共同ボンブへ水汲みにゆくのは厭いやな仕事だと思つて居たのが、今日はさうでもなく思はれた。ボンブの處には誰か相手が居る。白人、ミユラツト、黒奴、いろんな子供が、順番を待つ間休んで玩具の交換をしたり、喧嘩をしたり戯あそけたり、騒いだりしてゐる。ボンブは家から百五十ヤード位しか離れて居ないのに、ジムは一時間以内に戻つて來た例たとがない。しかも通常誰か迎へに行くのであるなど、考へた末トムは、

「オイ、ジム！ 少し塗つてくれ。水を汲んで來てやるから。」

ジムは、首を振つて、

「駄目！ 御内儀かみさんが水を汲んで來いつて、而して誰とも遊んでゐてはいけないつて言つた

んです。トムさんが、塀を塗つて呉れといふだろうが、御前は自分の用をしろつて………御内儀さんが自分で塀の方の世話を焼くつて。

「御内儀さんの言ふ事なんぞ聞かずといよ。御定まりの言ひ草ぢやないが。そのバケツをよこせ、直ぐ歸つて来るよ。伯母さんに知れるもんか。

「いけません。御内儀さんに搦まれると打たれるから——きつと打たれるから。

「御内儀さんが！ほんとに打つかい！指抜きで頭をコツンとやる位じやないか。誰がそんな事を恐がるもんか。口先ばかり恐ろしい事をいふけれど、文句は痛かないからナ………だが泣かれると弱るよ。ジム、石弾をやろう。白めんこをやろう。

ジムは迷ひ出した。

「白石弾だよ。ジム——素的なめんこだぜ。

「やあ！素晴らしい上等のダ………だけれど

トムさん、恐いな、御内儀さんが………

「私の痛い足の指も見せてやる。

ジムは高が人間なので、とうとう抵抗が出来なくなつて、バケツを下ろして白めんこを受取り、トムがそろそろ足指の繃帯を外してゐる處を、夢中になつて覗き込んでゐた。が、忽ち痛い背中を抱へてバケツを下げて往來をひた走りに逃げて行つた。トムはトムで急に精を出して塗り出した。ポリー伯母さんは手に上靴を持ち、目に勝利の誇りを見せて、その場から悠々と引き上げるのであつた。

併し、トムの精力は長く續かなかつた。今日、爲やうと思つたいろくの遊びの事を思ひ出して、失望は百倍した。もう直に、用事のない友達が思ひくの遊びを志して此處を通るだらう。而して働かされてゐる自分を調戲ふに定まつてゐる——と思つた丈でも、身内が火のやうに熱つて来た。自分の財産を取り出して見るに、玩具に石弾

に芥^{かま}くたが少々。之では仕事の交換は出来るが、三十分の遊び時間を買ふにはとても不足^{たり}ない。と、トムは貧乏身上をポケットに納めて、友達を買収する計畫を思ひ切つた。此暗黒絶望に當つて、忽妙計が浮んだ。實に天外から落ちて來た奇想であつた。

トムは、刷子を取上げて、落付き拂つて、仕事をやり出した。ベンが向ふからやつて來た——トムは一番この少年の嘲弄を恐れてゐたのに、その當の主が來たのである。ベンの步調のピヨンと跳ねシャンと飛ぶ風情を見ても心が軽く樂みは多いのが解つた。彼は林檎を噛りながら、折々好い聲で長く閑聲を上げては、太くチンドンドン、チンドンドンと言つて來る——蒸汽船の眞似なので。トムの近くへ來てからは、ベンは歩を緩めて、大道の中央に行き、右舷の方へ身を傾けて、重々しく船首を轉回させる。自分は汽船ミズリー號なので喫水九呎のつもりをやつて居るのであつた。船

と船長と機關とを一人で兼ねて、今や甲板に立て號令を出しながら、その號令を實行してゐる譯なのであつた。

トムは、汽船には目もくれず塗つて居た。ベンは一寸目を見張つて、トムに向ひ、

「ヤーイ！ 君は困つて居るのだナ？」

返答もせず、トムは技術家氣取りで、今仕上げた部分を鑑定し、また軽く一刷子渡してその結果を眺めて居ると、ベンは愈々間近く寄つて來た。

トムは林檎を見て欲しさに、口に唾が出て來たが、側目^{わきめ}もふらない。ベンが、

「オイ君。仕事をさせられて居るのかい。といふとトムは仰山^{ぎやうざん}にくるりと向いて、

「やあ君か。ちつとも氣が付かなかつたよ。

「あのね、僕は水泳にゆくんだよ。いゝか水泳に。君行きたくないか……併し君は仕事を
する方がいゝんだらう？——そうだなあ、君。

トムは、やゝ暫し相手を眺めて、さて、

「一體如何な事を仕事ツていふんだ。

「それ、それが仕事ではないか。

トムは、塗りながら無造作に答へて、

「さうかも知れない。が、さうでないかも知れない。とにかく、トムサウヤーといふ人間には、之が氣に入つてゐるんだ。

「フーン！ だつて、まさか君は其が好きだつていふのでも無からう？

「好きかツて？ 好かないツていふ譯もないではないか。僕等は塗りたいツたつて、毎日塀を塗るわけには行かないからね。

之で、忽ち事件が新方面を呈した。ベンは、林檎を噛むのを止めた。トムがすつ／＼と巧みに刷子を使ひ——一步下がては、その結果を眺め、ちよい／＼手を入れては又出来映を鑑識する一舉一動を、ベンは見守つてゐる中に、段々面白くなり、段々其に呑れてしまつた。

「あのね、君。僕に少しやらせて呉れたまへ。

トムは、考へて——承諾しやうとして又氣を換へて、

「いや、いや、だめだろうよ。ポリー伯母さんは、この塀の事はやかましいコンだもの。往來に向いてゐるだろう、ね裏の方のだと僕は構はないし、伯母さんだつて構はないんだが、この塀はやかましいンダ。氣を付けてしないと駄目なんだ。正當と不都合のないやうにやる人ツていふと、さうさ、千人に一人、ひよつとすると、二千人に一人もあるまいと僕は思ふよ。

「そうかなあ！ 併し、少し、ほんの、少し、僕にやらせて呉れ！ 僕が君なら君にやらせるのになあ。

「實際正直の處、僕は君にやらせたいのだよ。けれど、ポリー伯母さんが——ジムがやりたがつたのを矢つ張やらせないのだ。ね、だから僕だつて困るよ。君がこれをやり出して、もし如何いふ事か仕出来さうものなら。

「何だ！ 僕だつて、十分氣を付けるよ。まあやらせて御覽。あのね、——此林檎の心を上げらあ。

「うんそんなら——まあ止さうよ、ベン。心配なもの。

「では林檎を皆なやるよ。

トムは、外面不精／＼に、内心喜躍して、刷子を渡した。蒸汽船ミズリーが、日向で、せつせと汗を流して働いてゐると、退隱した技術家トムは、樹蔭の樽の上に腰を下ろし、兩脚をぶら／＼させ林檎を噛りながら、同じ手段でもつと人を引掛けやうと企んで居た。果して引掛かる者が多くあつた。ちよい／＼通り掛かる子供連は、始は、嘲り笑つても、皆止まつて塗つていつた。ベンが働き疲れた頃には、繕つてある紙鳶一枚で、ピリーが請負ひ、ピリーが倦きた頃に、ジョネーが死んだ鼠と其を吊り下げる紐を出して後を引受けた。其から次／＼と何人がか何時間かやつて、遂に午後

の眞中になつた。朝の内の貧乏少年トムは呻吟る程の寶持ちなつた。前に言つた物品の他に、石彈が十二、口琴の破れたのに碧ガラスの破片が一つ、糸巻製の大砲に、何の役にも立たぬ鍵、白墨の破片に、ガラス徳利の口、ブリキの兵士に、蛸蚌が二尾、疳癩玉が六つに片目の子猫、眞鍮の戸の取手に犬の首輪（但し犬はなし）、ナイフの柄と密柑の皮四片に破砕れた窓枠とが手に入つた。その間中、トムは友達に取巻かれて、ぶら／＼面白く遊んで、塀はといふと、一度どころか三度塗りが出来た。もしペンキが無くならなかつたら、トムは、村中の子供を皆破産させる事が出来たらうに。

トムは、人生はさう空漠でもないと思つた。不知の裡に彼は、人間行爲の一大法則を發見したので、即ち老幼の別なく、人をして物を欲せしむるには、其物を得難くさせるにあるのだ。トムも偉い賢哲であつたら、「人が爲なければならぬ事が仕事

で、爲ないでも宜い事が遊びなのである」との理屈を悟つたのであろう。しかし實際は、トムは、

忽ちの裡とに金持になつたものだと思ひながら、伯母さんへ報告にと歩み去つた。

子供 の 衛 生

——このころ注意すべきこと——

醫學士 石 塚 保 吉

正月に關したる子供の衛生

正月は、年の始めで、大人にとつてもおめでたい時であります。殊に子供にとつては、一年中の最うれしい、最楽しい時であります。しかし、此よんこばしい好時節に、やゝもすれば、子供は健康をそこなひやすく、甚だしきは、非常なおめでたい時を、非常な悲しい時としてしまふやうな事があります。

これは、暮れのいそぎと、お正月の取り込みにまぎれて、自然子供に對する注意が怠られるからです。つまり、子供は、いそがしい大人の犠牲に

せられるのです。

少し大きい子供になると、お正月は實におめでたい。學校はやすみなり、御馳走は澤山ありといふので、自然生活が不規則に流れる、御馳走も種類を擇ぶひまがなくなつて、腸胃を害するのは、殆ど常例になつて居ります。

しかし、これではおめでたいお正月に、けちのつくわけであるから、お正月は特に衛生に氣をつけて、食物にしても、分量、種類など、よほど注意して載きたいものです。

正月の遊戯

また正月は、子供の遊戯が盛に行はれます。其